

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2014年 夏号 7月9日発行 通巻53号

発行人：竹内 章（府中市分梅町）

TEL 042-364-3428

財政の歴史をたどり
豊かさの伝説を読み解く

府中市民財政白書を発行

「市民が分析した府中市の財政」(府中市民財政白書)を2014年3月に作成・発行しました。作成者は、府中かんきょう市民の会の会員4人(浅田多津子、坂倉典子、西宮幸一、小西信生)を含む市議会議員、市民の18人で、執筆・編集まで自分たちで行ない、印刷は外注しました。※

財政白書の内容は、今回は「パート1／歳入編」とし、「財政の歴史をたどり、豊かさの伝説を読み解く」との副題どおり、歳入の時系列分析、主な歳入項目の分析を、近隣の他市比較を含めて行なったものです。

パート1を歳入編としたわけは、「かつては豊かだったとされるが、今は厳しいとされる府中市の状況を、歳入面から分析することで、今後の市財政をより深く、より正しく理解し、市民のみなさんとその理解を共有できれば」と考えたためです。

白書の概要

分析内容の具体的な中身は、白書を読んでもいただくことがベストですが、概要を説明すれば、都市伝説としてまことしやかに、「府中市は豊かなので市民の税金は安い」、「大企業・優良企業が多いので財政は豊かだ」、「競馬場や競艇場があり、ギャンブル収入で潤っている」などと言われてきましたが、事実とは必ずしも一致しない、と白書では分析しています。

市民税

例えば、普通の個人が納税する「個人市民税」の税率は6%で全国の他の市町村と同じです。

企業が納税する法人市民税は市税全体の6%強の割合です。「大企業・優良企業が多いので財政が豊か」と言い切れるほど高い割合ではありません。

固定資産税

現在の市税収入で最大のものは固定資産税で市税収入の約半分を占めており、これまでほぼ一貫して増加しています。府中市の土地面積が増えたわけではありませんが、土地は生産緑地から住宅や事務所などになると、税額が増加します。

私たちが守っていき活動している農地について、市政60年で約50分の1以下になったとのことですが、このおかげで市は豊かさを維持してきたとも言えます。

「みどり豊かな府中」を維持することが、財政面での豊かさと同様に大切なことだと、活動を続けていく必要も、このあたりにあるのかもしれない。



財政白書検討風景
平成25年七月三〇日撮影

競走事業収入

「競馬場や競艇場があり、ギャンブル収入で潤っている」との話は、府中市日吉町の東京競馬場や、是政の競艇場のことを指している人も多いようです。しかし、かつてギャンブル収入で潤っていたのは、大田区の平和島ボートレース主催によるもので、競馬は中央競馬会、是政ボートは青梅市の主催によるもので、府中市には迷惑料として数億円の寄付金は入りますが、主催による収益はありません。

府中市の平和島ボートレース開催は、昭和30年(1955年)から継続して行われ、収入は累計で2,670億円、多い年は1年で168億円の事業収入を府中市にもたらしました。しかし、バブル崩壊後ギャンブル収入は減り続け、現在は市の税金から赤字補てんするような状況にはありませんが、収益は0からプラス10億円程度で毎年推移しています。

本当に市財政は厳しいのか

現在、全国の市町村1,727自治体中、普通地方交付税の不交付団体は、平成25年度で府中市を含む48団体にすぎません。

その意味で、府中市は財政的には数少ない優良自治体ですが、20年以上前の府中市の財政と比較すれば、市民税からの歳入は横ばいで、ギャンブル収入も見込みにくく、高齢化などにより支出が増加し続けている現状から、家計での貯金に相当する基金はあるものの、財政状況は厳しさを増していると言えます。

今後の活動

今後、市民による財政白書作成の作業は、「パート2／歳出編」の発行を目指して検討作業を続けていく予定で、約2年後の完成を目指しています。

どうぞ、市財政の数字に触れて、府中市の財政について状況の理解を深めていただくようお願いします。(小西信生)
※啓文堂府中店にて1,000円で販売中。

第14回 レンゲまつり

府中 東高校 生物部の報告

先月4月にレンゲ祭りがありました。私は調布市にすんでいるので、このお祭りに参加するのは初めてでしたが、とても活気があり楽しいお祭りでした。

今回私たち、府中東高校生物部は普段行っている環境教育の実践として、蜂蜜絞り体験、バルーンアート体験、生物部の生き物ツアーなどで参加させて頂きました。私が担当したのは、バルーンアートでミツバチをつくることと府中東高校生物部飼育生物ツアーのガイドでした。

バルーンアートといっても、子供にも作れるような簡単なものでした。作り方を教えているときに、子供たちが一生懸命私の話しをきき、作ろうとしていた姿が、とても印象に残っています。私たちも見習わなければいけないと考えさせられました。



今回、お祭りに参加して、私は主に二つのことを学びました。一つは、自然環境を維持していくことの大切さです。なぜかという、純血のハチというのは、自然環境が悪化してしまうと、逃げてしまう習性があり、地球にある植物の4割がハチがいないと受粉できません。そのため、ハチがいなくなってしまうと、植物が育ちません。そう考えると、自然環境を維持していかなければならないと、今回のレンゲ祭りを通し、自然と触れ合ったことにより関心を持ちました。

二つ目は、人と触れ合うことの大切さです。今回このレンゲ祭りを通して、沢山の子供たちと保護者の方々と触れ合うことができました。子供たちがバルーンアートや蜂蜜絞りの体験をしているとき、とても真剣に一生懸命やっている姿をみて、私たちも真剣に教えることができました。

その中で、一生懸命やることの大切さと楽しさを気づくことができました。そして、人と触れ合うことで、相手から何かを学ぶことができるということがわかりました。

私たちの飼育している、ミツバチもレンゲ祭りのレンゲ畑で蜜を集めていることと思います。また、レンゲと触れ合う自然体験が貴重となり、大切なことだと思いますので、是非来年もレンゲを育てて頂き、私たちも参加させていただきたいと思っています。(府中東高校 生物部1年 H.M)



子供たちと一緒にバルーンアート作り

生物部の飼育生物ツアーでは、ハチ、クローバー、カモ、ジャガイモ、魚、ウサギのうさ太、オカメインコのルーク、ハムスターの小太郎の順に部活で飼っている主な動物を紹介しました。

子供たちが、うさ太や、ルークを紹介したときに「抱っこしたいー！可愛い！」と言って、とても嬉しかったです。子供たちが生物と触れ合うことによって、もっと動物を好きになってくれるといいなと思っています。

蜂蜜絞りの体験では、その係りをした先輩に話をきいたところ、だいたい300人くらいの親子の方々が参加してくださいました。

蜂蜜絞り体験というのは、遠心分離機のハンドルを回し、遠心力を利用して蜂蜜を絞る機械を体験してもらうというものでした。子供たちも保護者の方々もとても楽しそうに体験していました。その体験で、4, 6kgの蜂蜜を収穫することができました。



府中東高校生物部、全員集合！

布ぞうり作りを体験して

4月26日(土)に開催されたレンゲまつりで、布ぞうり作りを体験させていただきました。最初にかかとの部分を作り、そこから足の幅に合うように布をよっていきます。形がくずれないように集中していたからか、アツという間に一時間半近くがたっていました。最初と最後の鼻緒の部分が難しいですが、隣で一緒に作りながら教えていただいたので、何とか形になりました。以前はわらで作っていたのですが、わらの入手が簡単でないため、布で作っているとお話を聞きました。



筆者が作った布ぞうり

て、その時は、「コンビニができて便利になった」「また家が建ったんだな」と思うだけでしたが、現在の職場に来て見方が変わり、家が建つということは、その分田んぼが減っているということなのだと思いました。そして、田んぼの減少がぞうりの材料にも影響を及ぼすのだと知りました。

相続の問題や担い手の減少など、田んぼを手放す理由は様々あるのですが、田んぼなどの緑は、生き物の生息、地下水のかん養、ヒートアイランド現象の緩和など、様々な機能を有しています。また、自然との触れ合いは、ゆったりとした時間の中で過ごすことで心が落ち着いたり、色々なことに気付いたりする場となります。これらを守り、次世代に残していくために、一人ひとりが何ができるのかを考えなければなりません。

きっかけは何でもいいと思います。大きな変化でなくてもいいと思います。少しでも多くの方が、ちょっとしたことから気づき、変わっていければ、大きな変化になります。まずは身近なところから、自然に触れ、環境について考えていただけたらと思います。手始めに、布ぞうり作りなどいかがでしょうか。(環境政策課 宗村将之)

話は遡りますが、私は、中学入学直前に押立町に引っ越し、平成13年まで押立町に住んでいました。中学生の頃は会場周辺は全て田んぼで、一軒緑色の家がポツンと建っただけでした。それから、段々と家が建ち、コンビニエンスストアができ



府中市制施行60周年記念事業

レンゲまつりを無事に終えて

レンゲの咲きぐあいは…

今年の1月頃は、南側の田んぼは、レンゲが6割程度育ち、順調に生育しているようでした。しかし、4月中旬にレンゲの花にムラが見られ、タコゾウムシの発生もあって、花も花芽も少なく、今回もあまり良い開花状況ではありませんでした。北側は種をまく時期が遅れ、ほとんどレンゲが育ちませんでした。毎年、栽培担当者はいろいろ工夫をして、レンゲを育てていますが、苦戦を強いられています。

おまつりの内容は…

今年は天気も恵まれ、大賑わいで約400名の来場者がありました。

恒例の「花飾り遊び(写真上)」「シャボン玉」「コマ作り」「草笛」に加えて、今年は「布ぞうり」「バツタ作り(写真下)」を行ないました。「布ぞうり」の担当者は、市の職員が「布ぞうり」を一緒になって作った事に「大変感激した」と後で語っていました。また、初参加の都立府中東高校生物部の高校生の皆さんの活気あふれる活躍が目立ちました。

東日本大震災の募金の報告

「レンゲまつり」では2011年に続き、2回目の「東日本大震災の募金」を行ないました。当日、集まった4,2850円は、6月に、府中かんきょう市民の会の会員が「いわき市双葉町役場」へお届けした事を報告いたします。ご協力くださった皆様、ありがとうございました。(梅沢みどり)



源兵衛川を訪ねて

水の都・三島

富士山のひろい裾野には忍野八海や柿田川など湧水が多数ある。東海道宿場町であった三島にもあちこちに湧き出し口があり、元・小松宮別邸の楽寿園内の小浜池(こはまいけ)は源兵衛川の水源になっている。今は水量が少なくなったとはいえ、昨年夏訪ねた折にはカルガモ親子が水にもぐる姿もみえた。

みしまの名は三つの島の由来で、市の中心部だけでも源兵衛川、宮さんの川、四ノ宮川、御殿川、桜川など幾筋もの川が流れて、水の都をかたち造っている。



源兵衛川のほとりで語らうご夫妻か？(撮影日はいずれも4/23)

日本の高度成長期以後、工業用水や宅地開発などの影響から水量が減り、川の汚染が目立ち始めた。これに歯止めをかけたのが1990～98年の「水環境整備事業」農水省の補助による住民参加型事業で、市民と行政の連携による新しい再生への糸口となった。これ以後の三島は眼に見えて好転し、川がきれいになるに留まらず街は活性化しシャッター通りも解消しているという。この施策により住民意識が変わり、主体的に「私の住む町」として動き始めたのではと、現地に行って体感した。

今、府中で取り組もうとしている「協働」も、こうしたプラスの方向へ進んでいくのだろうか？



有償ボランティアの清掃

源兵衛川沿いを歩いていると気軽に声をかけられ、昔は大水で難儀したとか、洗濯や野菜も洗ったなど。川のテラ

スで談笑するかた、犬の散歩、カメラ片手に旅行者らしい人も。川の清掃は有償ボランティアで毎日見回るとか。

水辺にはヤナギモ、キショウブ、セリ、川魚も多数見られた。毎年「ホタルまつり」も開催されているそうだ。

事務所前でスタッフの村上さんとルイスさん



グラウンドワーク三島

1992年、水辺自然環境の再生と改善を目的に「グラウンドワーク三島」は発足された。今年で22年目になり、20年史も発行された。

グラウンドワークとは80年代の英国サッチャー政権下に国家的政策として進められたもので、市民・NPO・行政・企業のパートナーシップ＝協働により、各人の主体的で創造的な能力を発揮しあうことで、持続可能な地域社会を構築するというポリシーである。この趣旨を受け、日本で初めて三島に結成された。

私は伊豆の生まれで、60年代初めは三島の高校へ通学していたから、市内はよく知っているつもりだった。しかし、昨年6月29日の西府崖線湧水チーム企画の加藤正之講師による講演会「身近な水辺から生物多様性を考える」に参加して、今さらながら故郷を再認識した次第です。

源兵衛川を昨年、今年と訪ねて土地の方からお話をうかがい、グラウンドワーク三島の事務所も訪ねた。そこで資料や会報の季刊「ボランタリーニュース」をいただいた。カラー刷り8ページにギッシリ詰まった記事には、世界中からの視察来訪者や環境教育実践、数々の受賞、TV放映の紹介など多彩である。加藤氏はこの会の理事でもある。もう一人の専務理事の渡辺豊博氏は、今年1月の府中市市民協働推進シンポジウム「協働ってなに？」で迫力ある基調講演をされた。グラウンドワーク三島を牽引されている方で、東京農工大学出身と府中とご縁もあり、ジャンボさんの愛称で親しまれている。

西府崖線エリアの夢

昨年の加藤氏提案(河童も棲みたくなる水辺づくり)のC案が参加者の頭に焼きついているのではないだろうか？詳しくは「西府崖線保全活動No.9(平成25年10月1日発行)」を参照。

源兵衛川を訪ねた後では、計画案の市川緑道沿いのカッパ池南側緑地に、雑木林と散策路による憩いの場づくりの夢がますますふくらむのであった。(竹村勝代)

市民ボランティア環境調査

多摩川に咲く花の観察会

日 時／5月18日(日) 9:30～12:30 快晴
 参加者／19名(一般15名 府中かんきょう市民の会4名)
 講 師／星野義延氏(東京農工大学准教授)
 主 催／NPO法人 府中かんきょう市民の会

今年も星野先生を講師にお迎えし、8年目の「多摩川に咲く花の観察会」が行われた。今回初参加という若い2人の方や野生植物に大変熱心な方など、好天とともに楽しい雰囲気うちに観察が進められた(写真右)。

始めに植物リスト(61種)が配られ、中河原公園を起点に関戸橋から川下へ河川敷の草花を探しながら歩いていく。星野先生から多摩川は植物種の豊富な事(昨年239種確認)、しかしながら外来種の勢力は強く、その中でも要注意外来生物は個人の庭などへの移植は禁止されており、在



レンリソウ



来種と外来種の交雑が心配されるなどの説明があった。

先生は1種づつ手に取り膝をついて説明され、参加者の質問にも丁寧に答えて下さいました。5月の河原は花盛りで黄・青・白・紫・紅など華やか。

リスト以外にもカワラサイコ、マツバウンラン、カントウタンポポなども観察できた。絶滅危惧種は参加者の関心事でありミゾコウジュ(シソ科/紫花)、ハタザオ(アブラナ科/黄花)を見つけ、特に大切に保護活動を続けているレンリソウ(マメ科レンリソウ属/紫花、連理草の名前は小葉が対生して連なってはえる状態に由来)は花も盛りに群生しており、市民が見守ってきた成果に、星野先生も写真を撮りながら喜んで下さいました。

このように息長く自然観察を続けて、まず現況を自分の眼と体で深く理解することが、環境保全の第一歩だと感じました。(竹村勝代)

府中 水辺の楽校

平成26年度予定

今年も多摩川に子ども達の季節がやってきました。

府中水辺の楽校は、今年も例年通り6月の安全講習会を皮切りに、ほぼ毎月の開校が予定されているようです。なかでも、8月の「多摩川源流体験教室」(1泊2日)は人気です。また10月には、「多摩川河口観察会」で、府中流域とは違った、河口の自然環境の観察・体験が予定されています。

府中水辺の楽校では、河原の石ころも観察の対象になっています。子ども達が河原の石ころで、オリジナルの標本箱を作り、多摩川の源流の山々の成り立ちを学び、遠い遠い過去に想いを馳せるのです。

水辺の楽校は、「水辺で学ぶ学校」です。「川」が教室であり、先生です。大人はその手助けをしているだけです。子ども達が、机の上では学べないことを、体を通して、楽しく学ぶことを大切にしています。また、水辺の楽校は、小学校とその保護者が参加する、総合学習支援も行います。

自然体験の少ない親世代も、子どもと一緒に、川の危険

と安全を学び、川に慣れ親しみ、身近な自然の大切さを識る機会を提供しています。

府中水辺の楽校の参加者数は、当初の900余人から年間延べ人数は2000人に達しています。

小学校3年生の時から参加し、中学生になった今では、チューターとしてスタッフの手伝いをしている子どももいます。そして、府中水辺の楽校では、今年度も盛り沢山のイベントが予定されているようです。一人でも多くの子ども達に参加して欲しいものだと思います。

府中市は昔からの住民と、新しい住民とが入れ混じっています。多摩川とのかかわり方が違うのは当然です。しかし薄れつつある、多摩川を身の内とするこの土地の「風土」を新しい風のなかで、どのように変え、継承して行くのか、期待は子ども達です。

彼らが成長したとき、真の「共生」を生み出してくれそうな気がしています。(椋島 弘通)

問合せ:府中水辺の楽校運営協議会事務局
 (府中市 生活環境部 環境政策課内)

なぜ、昔の農作業を体験するのか？

田んぼの学校 2014

開校式と田植え

第9回「田んぼの学校」が、5月25日(日)の9～12時まで開催されました。今年も、①田植え②草取り、生き物さがし③稲刈、ハサカケ④脱穀、もみすり⑤収穫祭の5回を体験学習します。田んぼに出ないときは、家で育てたバケツ稲をお母さんと一緒に成長の様子を観察し、気付いたことを書き止め、開花などの稲の一生を体験・学習します。

日本人の主食であるコメをつくる過程は、現在ではほとんど田んぼに入らず田植え機による「機械植え」をするか、「飛行機による散布」です。稲刈もコンバインによる刈込、脱穀、もみすりです。最もつらい除草も、1回の除草剤散布で済ませます。

この学校では、なぜ4～50年前の農作業を体験させるのか？ 誰でもその疑問が生じます。今の水田稲作業は、機械操作のため子供には無理があります。昔の農作業を体験学習して、現代の農業資機材の必要性がよく理解できますし、田んぼの中の生態系がよくわかるなど、教育的効果があるからです。

今年から、府中東高校の生物部のメンバーが新しく加わりました。東京農工大関係の知識、経験豊かな人材がスタッフになっているのは例年通りです。また、柿本実行委員長が新しく就任したこともあり、新風を吹き込むことを期待しています。



恒例となったピョピョさん体操(写真上)。準備体操のひとつですが、リーダーが生徒、スタッフと一緒に合唱し調子をとります。大人が童心にかえり、一体感が生まれます。

2列に分かれ、稲苗を手渡され、東西から田んぼに入ります。緊張の一瞬です。泥のヌルヌル感、靴下をはくも指の間からニュルーと押出される泥の感覚をいろいろに表現していました。キヤー、ヒヤーといった叫び声となります。生まれて初めての泥体験でしょう。恐怖や気色悪い感覚が意外に心地よさに変化するのが伺えました。やがて植えるのにも慣れ、今度はザリガニなどを見つけて大声を上げます。

10cm近くの稲の1茎が60日もすると、1m近く伸び、2～30本に分けつすとは想像できるでしょうか？ 生徒のみなさんは、きっと驚くでしょう。

田植えを終えて泥を落とし、手足洗いを終えた生徒たちの満足そうな顔を眺めていると、私たちまで誇らしくなります。稲作技術には伝統があり、いろいろな食糧源として利用され、人類は生きてきました。そして、様々な文化も生まれてきました。是非、生徒には、その一端を体験したのだと認識してほしいのです。今や、アジアだけでなく、世界中で稲作が行われ、特にアフリカの食糧不足国では水田稲作に力を入れています。

次回は7月6日(日)です。暑くなっていますが毎年人気のある「草取り、生き物さがし」です。楽しみです。(竹田 勇)



田植え開始！
(東京農工大農学部 附属本町農場にて)

当日は開校式と田植えをしました。開校式では主催者である「NPO法人府中かんきょう市民の会」竹内理事長、同じく府中市を代表して加藤環境政策課課長。さらに、指導、試験農場、試験資器材を提供・貸与して下さる東京農工大農学部を代表して大里教授が挨拶されました。いずれもコメの一生を体験学習し、コメの1粒の大切さ、水田生態系と稲の生長を知り、自然・環境に興味を持ってほしい、大切にしてほしいと挨拶されました。

最初の登校日であるので、スタッフの紹介と担当分野を話しました。今日は田植えとバケツ稲について、田植えの仕方、バケツ稲の植え方の説明をしました。いずれも「1本植え」を勧めました。

ザリガニぞ！



和田緑地保全の森に至る経緯

平成13年9月4日父義秋が他界し相続が発生した。当時は、京都議定書(温室効果ガス排出量)が社会問題視され始めた時代だった。相続の手続き上、一番先に雑木林の評価額が頭をよぎった。副都心の農家の相続は億単位の数字が並ぶため、すぐに会社へ辞表を提出した。妻に話したのは提出後で、「これから私たち家族の生活はどうするの。あなたは何を考えているの!」と激怒した。一方、世間的には環境保全を一番に決断したことは、社会的評価が高い。おまけに寄付行為の諸経費全て自己負担をしたのであるから。

金銭を生まない選択をしたこと、自ら企業を退職し生活を犠牲にしてまで、里山保全に努めたことに対し、行政側のフォローが不可欠だったと思う。

多摩市は「緑の基本計画」で、里山一体に網をかけていた。市へ雑木林の譲渡を持ちかけたが「予算がないが雑木林は保全したい」と。

私は国・都議会議員へ相談を持ちかけたが、答えは一つ、寄付行為以外の選択肢はなかった。環境省へ雑木林の保全について協力を求めると「一番先に、あなたがすることは国に相続税を納めることが優先です」との回答には憤りを感じた。

多摩市と寄付の打ち合わせ最中、前市長は汚職で逮捕され、寄付行為が10ヶ月以内に完結できるのかと不安の毎を送った。もし相続人が相続した場合、雑木林の評価額が20億円を超える。つまり相続税を納付するために、雑木林を造成し大規模開発することになるのである。



小学生の落葉掻き

その後の市長選挙で、初当選した渡辺幸子市長と面会し、「雑木林を保全するために多摩市へ寄付をします」と発言したとき、市長はたいそう驚かれた。

寄付条件は、「農家が毎年行ってきた雑木林の手入れを継承することを絶対条件とします」である。渡辺市長は被相続人の熱い意思を継いで、緑地保全に努めると意見を述べられた。

その後、平成19年東京都特別緑地保全地域に指定され完全に網がかけられたが、のちに問題が発生した。寄付をした雑木林の一部が特別緑地保全地区から計画的に外されていた。市は道路拡幅の為にセットバックをした形で緑地保全地区として東京都へ申請したのである。

平成24年「なな山緑地の会」高木会長から道路拡幅計画を聞き、私には全く打診もなく、都から補助金をうけ拡幅の手続きが進化した。同年に多摩市緑の基本計画市民説明会に出席し公の場で、寄付の与条件と全く異なる多摩市の対応を強く批判した。担当者は何一つ反論できず、会場は静まり返った。



山始め2014

行政は担当が変わると当時の寄付目的すら忘れ、寄付者の気持ちを踏みにじる行為は如何なものか。里山保全を目的に寄付した雑木林が、車・人を優先とした人間界の身勝手極まりない行為が、環境破壊に結びつくことが何故わからないのであろうか。

市民と行政が協働し、環境保全活動するうえで最も大切なことは、生態系の目線でモノを観ることが重要であり、雑木林を人間の愚かな考えで環境破壊にならぬよう、市民が監視する必要がある。雑木林は農家が今日まで維持管理し、数百年の時が流れ、現在の姿をなしているのだ。

寄付後、近隣の有志が、「なな山緑地の会」を立ち上げ現在に至る。昨年は10周年記念誌を発行し、大々的にお祝いを官民一緒に行った。

現在、雑木林には、保育園園児から小学校児童が一年間を通し、数百人単位で環境学習の場として定着。管理面積は、西の山1.1h・中の山(市購入)・東の山(市購入)となり、総面積も3h近くに増えた。(住崎岩衛)

<現在までの助成金企業一覧>

花王石鹼、大成建設、全労済、生協、東京建築士会、西武信用金庫

<現在までの受賞一覧>

平成23年: 緑の地域づくり部門 内閣総理大臣賞受賞
(多摩市と多摩グリーンボランティア森木会共同受賞)

平成24年: 日本建築士会連合会水戸大会「まちづくり賞」受賞(なな山緑地の会 単独受賞)

原発被災地を巡って

4月27日(日)、「陸前高田市民を勝手に応援する会」のツアーに参加しました。府中からは私を含めて3人が参加し、バスは2台、参加者は80名でした。23時に池袋を出発し、早朝陸前高田に到着。

何度か東北には行きましたが、陸前高田市は初めてでした。ベルトコンベアーが縦横に走り、巨大恐竜のようでした(写真下)。山を切り崩した土を直接ベルトコンベアーで現場に運び14.1メートルの高さまでカサ上げするのです。ダンプで運ぶと10年かかりベルトコンベアーでやると1年で出来ると云いますが、はたしてこれでいいのかなと……山を切り崩すのは自然破壊でもあります。ここに新しい町が生まれるのでしょうか…。



その後女川に行きました。ここは、リアス式海岸で、津波も他の所とは、まったく違い、広い所から狭い所に流れるので津波がせりあがってきたとのこと。



海拔から約16メートルの高台にある病院にも1階の1.9メートルの所まで水に浸かった「印」が刻まれています。隣の斜面ではさらに34メートルの高さまで駆け上ったそうです。

横倒しになった4階建ての七七銀行のビルが、そのまま残っています。行員は支店長の指示で屋上に避難。そのまま全員犠牲になりました。すぐ近くのビルでは高台に避難するよう指示があり全員無事だったとのこと。現在「避難」をめぐって裁判になっているそうです。

この後、石巻に行きました。瓦礫などはなくなりましたが、復興はこれからという感じです。

松島では、東松島市大曲浜で家族4人をなくした高校生の伊藤健人さんが5歳の弟が好きだった青い鯉のぼりを見つけて揚げたのがきっかけとなり、全国から沢山の鯉のぼりが集まり、青空に元気よく泳いでいました(写真上)。

現在は、支援のバスツアーはほとんどなくなっています。しかし、これまで4回取り組んできた旅行社が原発の福島へいこうと計画しており、そのときは是非参加したいと思っています。(勝谷寛子)

NPO法人 府中かんきょう市民の会

会員と援農 ボランティア募集

私たちは、1999年4月に発足した府中の環境やまちづくりを考える市民のボランティア団体です。2004年10月にNPO法人の認証を取得し、府中市や大学などの協力を得て、レンゲまつり、田んぼの学校、公園・緑地の美化、野鳥観察会、植物観察会、西府崖線保全活動、バス見学会、援農ボランティアなどの活動を行っています。

このような「環境ボランティア活動」を通して、府中のまちを住みやすく次の世代の子供たちに誇りをもって残していける「まちづくり」を目指して活動している団体です。私たちと一緒に活動しませんか。年会費は2000円です。なお、詳しい活動内容についてはホームページをご覧ください。



レンゲまつり



田んぼの学校の田植え

また、2002年から活動している「援農ボランティア」も募集しています。その援農ボランティア仲間が中心となり、野菜栽培の体験学習の場として「畑の学校」を開設しています。詳細は会報(2014年春号/4月9日発行)に記載しています。なお、会報はホームページにも掲載しています。お問い合わせは以下です。

- 会員 竹内 章(042-364-3428)
- 援農ボランティア 竹田 勇(042-364-3623)